

機関番号：33912

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720207

研究課題名(和文) タスク前計画時間が初級・中級・上級英語学習者のスピーキング運用力に与える影響

研究課題名(英文) Effects of pre-task planning on oral performance in different proficiency learners

研究代表者 新多 了 (NITTA RYO) 名古屋学院大学・外国語学部・講師

研究者番号：00445933

研究成果の概要(和文)：

これまでタスク前計画時間がスピーキング運用力に与える影響について様々な研究が行われてきたが、その多くが英語圏に滞在する上級レベルの学習者についての研究であった。本研究では非英語圏(日本)に滞在する初級スピーキングレベルの学習者を対象として研究を行った。その結果、上級レベル学習者を対象とした先行研究のような計画時間の強い効果は見られなかったが、計画時間の有無により、多くの学習者にスピーキングスタイルの変化が観察された。

研究成果の概要(英文)：

The task-based literature shows that learners tend to improve their oral test performance in terms of fluency and complexity when given time for planning, but as this work has usually involved advanced learners, it is not clear whether beginning EFL learners with limited experience of L2 interaction will experience similar benefits. This study investigates pre-task planning effects on beginning EFL learners' paired oral test performance. The findings suggest that pre-task planning time for such paired tasks does not seem to have a strong effect on performance or on cognitive processing. However, the results also indicated a trend of changing speaking modes between planned and unplanned conditions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論

1. 研究開始当初の背景

近年、日本の英語学習環境において、コミュニケーション重視の英語授業の必要性が主張されているが、実際の現場では、なかなかそれに対する手立てが取られていない。世

界的な英語教育の趨勢として、これまでの第二言語習得論の研究成果から、コミュニケーション活動を中心に据えながら、文法・語彙等、言語の形式面にも注意を向け、バランス

のとれた第2言語の発達を目指す「タスクを中心とした言語活動」の有用性が確立している。(例 Ellis, 2003, van den Branden, 2006, Samuda & Bygate, 2008, Willis & Willis, 2007)

これまでタスクに関して様々な研究が行われてきたが、中でも最も盛んな研究分野として「タスク前計画時間の効果」がある。これまで多くの研究が目標言語使用国内(例えば英米に滞在する英語学習者)で行われてきており、日本のような外国語環境で行われてきた研究は、質・量ともに十分でない。したがって、本研究では「日本で英語を学習する日本人」を研究対象とした実験研究を行っていく。また、計画時間が与える効果について、それがあらゆる習熟レベルに共通のものか、あるいは異なる効果が見られるのか、十分には検証されていない。例えば、Wigglesworth (1997)は、よりレベルの高い学習者の方が、効果的に計画時間を使うことで、より高度な第二言語運用を行うことができると主張している。その一方 Kawauchi (2005)は、上級の学習者は、計画時間がなくてもすでに十分な第2言語運用能力があるため、中級レベルの学習者の方が計画時間の与える効果が大きくなる可能性を指摘している。本研究でも Nitta (2007)において、計画時間の有無と学習者レベルの関係について研究を行い、Wigglesworth と類似した結果を得ているが、結論づけるにはまだ多くの検証が必要である。したがって、本研究では、非英語圏(日本)に滞在する英語スピーキング初級者を対象として計画時間の第二言語運用力への効果について検証を行う。

2. 研究の目的

- (1) 英語スピーキング初級レベルの学習者に対して、タスク前計画時間の有無が与える英語スピーキング運用力の量的変

化

- (2) タスク前計画時間の有無が与える英語スピーキング運用力に対するテストスコア
- (3) タスク前計画時間の有無が与える計画時間中及びタスク中の認知プロセス

3. 研究の方法

- (1) 第二言語運用分析:採取した発話データをコード化し統計処理(T検定)を行う。先行研究で広く使用されている「流暢さ」、「複雑さ」、「正確さ」を表す指標を用いた。
- (2) テスト形式による評価スコアの分析:スピーキングテスト評価の経験豊富な2名の英国人研究者にビデオ録画したスピーキング運用を「流暢さ」「複雑さ」「正確さ」の3項目で判定してもらい、結果について FACET 分析を行った。

タスク後アンケートの分析:「認知プロセスに関するアンケート」(Weir et al. 2006)を用い、計画時間中及びタスク中の認知プロセスについて調査し、結果の分析(Wilcoxon Signed Rank Test)を行った。

4. 研究成果

- (1) 第二言語運用分析:「流暢さ」と「正確さ」について有意差は見られなかった。一方、「複雑さ」について、計画時間有りの際に「1ターンにおける語数」において統計的有意が見られた。
- (2) 評価スコアの FACET 分析:「流暢さ」と「複雑さ」において、計画時間有りの際に統計的有意が見られた。(表1参照)
- (3) タスク後アンケートの分析:計画時間無しの際、タスク開始前、学習者は自分の考えが簡単に伝えられると感じる傾向があった(統計的有意差有り)。しかし、計画時間中及び、タスク中には有意差が

見られなかった。

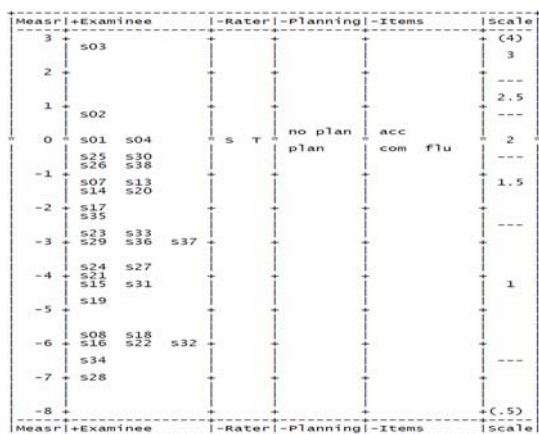


表 1 : FACET Map

本研究結果から、計画時間の有無がスピーキングタスクの運用に与える影響は、初級レベル学習者において必ずしも有効ではないことが観察された。しかし異なる学習者を対象とした研究では、その結果が「計画時間の有無」によるものか、あるいは「学習者個人の性質」によるものか明確ではない。今後は同じ学習者が異なる習熟レベルにある時点で調査を行い（例えば、留学前後）、さらに細かい分析を行っていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① Ryo Nitta & Ryoko Asano (2010). Understanding motivational changes in EFL classroom. In A. M. Stoke (ed.), JALT 2009 Conference Proceedings. Tokyo: JALT: 186-196. 査読有
- ② Kyoko Baba & Ryo Nitta. (2010). Dynamic effects of task type practice on the Japanese EFL university student's writing: Text analysis with Coh-Metrix. Proceedings of Florida Artificial Intelligence Research Society Conference: 217-222. 査読有
- ③ Kyoko Baba & Ryo Nitta. (2010). Effects of task type practice on the Japanese university students'

writing from a dynamic systems perspective: A longitudinal study utilizing multi-level text analysis. 金城学院大学論集第 6 巻第 2 号、pp. 61-72.

- ④ Ryo Nitta & Ryoko Asano. (2010). Understanding motivation-in-action from a Dynamic Systems Approach. 名古屋学院大学論集 言語・文化篇第 21 巻 2 号、pp. 37-49.
- ⑤ Ryo Nitta & Sheena Gardner (2009). Form-focused tasks in ELT coursebooks: A framework for analysis. 名古屋学院大学論集 言語・文化篇第 21 巻 1 号、pp. 19-41.

[学会発表] (計 6 件)

- ① Ryo Nitta & Kyoko Baba (2010). Long-term effects of repeating a timed writing task on beginning L2 learners' development. British Association for Applied Linguistics 43rd Annual Conference, Aberdeen, UK. September, 2010.
- ② Fumiyo Nakatsuhara & Ryo Nitta (2010). Effects of pre-task planning on paired oral test performance: A case of beginning EFL learners. British Association for Applied Linguistics 43rd Annual Conference, Aberdeen, UK. September, 2010.
- ③ Kyoko Baba & Ryo Nitta (2010). Dynamic effects of task practice on the Japanese EFL university student's writing: Text analysis with Coh-Metrix. FLAIRS-23, Florida, US. May, 2010.
- ④ Kyoko Baba & Ryo Nitta (2010). Does task type practice serve the university student's L2 writing development? A longitudinal study from a dynamic systems perspective. American Association for Applied Linguistics, Atlanta, US. March, 2010.
- ⑤ Ryo Nitta & Ryoko Asano (2009). Understanding motivational changes in classrooms. JALT Annual Conference, Shizuoka. November, 2009.
- ⑥ Kyoko Baba & Ryo Nitta (2009). Effects of task type practice on the Japanese EFL university students' writing from a dynamic systems perspective: A longitudinal study utilizing multi-level text analysis. British Association for Applied Linguistics 42nd Annual Conference, Newcastle, UK.

September, 2009.

〔図書〕(計1件)

- ① Ryo Nitta & Sheena Gardner (2009).
Consciousness-raising and practice
in ELT coursebooks. In T. Hedge (ed.)
English Language Teaching: Major
Themes in Education Volume II
(London: Routledge), pp. 83-98.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新多 了 (NITTA RYO)

名古屋学院大学・外国語学部英米語学科・
講師

研究者番号 : 00445933

(2) 研究協力者

中津原 文代 (NAKATSUHARA FUMIYO)

英国ベッドフォードシャー大学・英語学
習・評価研究所・講師